

## 「生まれる前からの口腔機能の育て方」



JSPS会長 土岐 志麻

### 略歴

#### 略歴

平成6年 北海道医療大学歯学部卒業  
平成11年 北海道大学大学院歯学研究科歯学専攻博士課程修了（歯学博士）  
北海道大学小児歯科学講座助手  
平成12年 青森市で開業（とき歯科）

全国小児歯科開業医会会長  
公益社団法人 日本小児歯科学会専門医指導医  
公益社団法人 日本小児歯科学会 常務理事  
公益社団法人 日本小児歯科学会北日本地方会副会長  
北海道医療大学非常勤講師  
東北大学臨床教授  
新潟大学非常勤講師  
日本大学歯学部兼任講師

私達、歯科医療従事者はむし歯の洪水の時代を経て、むし歯を予防する事の必要性を訴えてきました。そして今、歯という硬組織を診るだけではなく口腔の機能について考えるようになりました。昨年、15歳未満の子どもたちに「口腔機能発達不全症」という疾患名が発表されました。

多くの方が口呼吸の子どもたちが増えていることに気づき、子育ての現場では、食べ方に問題のある子どものことを心配しています。7歳になってもろうそくを吹き消せない、ガムを咬むことができない、一生懸命咬むと側頭筋が筋肉痛になる、給食の牛乳がなくなると飲み込めないのそこで給食を終えるという子、子どもたちに関わる大人からの声を聞くと、15歳未満の時にこれだけ機能の発達不全がある子どもが年をとり、飲み込む力や咀嚼の機能が低下したときに、どのように介護に取り組むのかとても心配になります。だからこそ、病名をつけ、私達専門家が機能の発達に関与しなければならないことになったのでしょうか。

ではいつから関与すればいいのでしょうか？子どもたちの発達不全はいつから起きるのでしょうか？

本来は生まれてすぐから哺乳のために口腔の機能を最大限に使用し、生きていくためにこの機能をさらに発達させるはずです。吸啜反射（サックリング）という原始反射があるのですから、みんな生まれてすぐから哺乳ができるのは当たり前と思うのですが、実際は吸うことが上手な赤ちゃんとそうでない赤ちゃんがいます。

赤ちゃんは、おなかの中にいるときから指しゃぶりをすることも知られています。口から羊水を飲みこむこともわかっています。ということは、もしかして、発達不全はおなかの中にいるときからはじまっているのではないのでしょうか？そうだったら、私達はどのように支援していくことができるのでしょうか？今確認されている問題点をお話し、一緒に考えていただければと思います。